

文化としての核データ収集活動

Data Compilation as Culture

国際原子力機関原子核科学・応用局
大塚 直彦

OTSUKA Naohiko
Department of Nuclear Science and Application, IAEA

核データの測定・評価研究をする教育研究機関は内外に多数あり、そこから多くの論文が出版されている。しかし、測定で得られた核データを収集・編集し、来るべき評価研究に備えるという余裕はこれらの機関にはない。そのような活動は国際機関に任せて、我々は分担金さえ支払っていれば良いのか。例えば野菜の供給を考えた場合、一般の消費者であればある野菜が欲しかったら八百屋に買いに行くだけで済むが、一国の食糧生産に責任を持つ立場の者は、普段は市場に出さないような品種をも含めて試験場にて収集し、市場や自然環境の色々な変化に備えているのである。核データもこれと同じことである。核データのもつ汎用性(ある研究課題のために取られたデータがそれとは独立した研究開発で役立つ)を考えれば、いつ役に立つとも知れないデータまで含めて将来の学術活動のために保存していく仕事が日本のような核データの一大拠点には必要である。そのためには、通常の教育研究機関とは違う、核データに関する将来のあらゆる可能性を見据えたデータ収集拠点があってしかるべきであり、それこそがデータセンターだと言える。北大が「データセンター」を標榜するようになったのは、ごく自然な、そして「フロンティア精神」を掲げる北大にふさわしい成り行きである。

かつて、江差の開陽丸を引き揚げる計画が浮上した時、必要な船体の図面が日本にはなかったのが、オランダでは図面はもとより、船体完成の際のパーティーのメニューまでが保存されていた、という話を引き合いに「保存したら儲かりますか、ということではない。保存したらどれだけ儲けがあるか、というのはつまり野蛮なのだ」と司馬遼太郎の講演録にあるのを最近目にした。それを読んで以来、データ収集活動は一つの文化であるような気が僕はしている。北大の収集活動も文部省の事業費がついていた頃は「儲け」がなかったは言えまい。しかし、特筆すべきはその事業費が切られてからも、北大の収集活動は途切れることなく、むしろ発展してきた観があることである。そもそもは純粹な核理論研究者の集まりである北大のグループにこういう核データ収集の活動が文化が根付いたのはとても不思議な気がするけれども、ともかく、どこにでも根付くものではないものが、北大にはうまい具合に30年以上に渡って根付き、また「国際人の涵養」を掲げる北大らしくこの分野で国際機関に職員を送り出すまでになった。

このデータ収集活動には、核物理の知識はもとより収集に関する色々な経験と知識が必要であって、一旦そのノウハウが途切れてしまえば、IAEAの職員が毎年指導にかけたとしても、そう簡単に再開できるものではないし、そもそも収集に対する高い意識を持った人材を見つけることが困難なのである。この分野で世界をリードする地位にある北大が、教員と技術職員を一人ずつ、それに一定の校費をこの文化のために投資することで、北大は原子核物理の成果の平和利用のために世界へ発信する卓越した拠点として、世界の学術と産業に貢献することができる。この活動には集中投資は必要ないが、継続的な投資が必要なのである。そして、日本をはじめアジア地域では北大以外にこの事業を独立して遂行する経験と知識を持つところが今のところ見あたらない。